

消灯

新嶋 樹

—
ふるさとの香川県を出てから十年、ずいぶん経ったように思うが、人と話していて、いまだに聞かれることがある。

「どうして島根県に？」

理由をしゃべる、というのが得意じゃなかった。多くの理由があつて島根県に来たことは確かなのだけれど、それを「くだから」と簡潔な言葉でとらえて説明することができない。ひとつひとつ相手に伝わるようにほぐしながらしゃべっていくと、どうも煩雑になってしまうような気がして、やめてしまう。聞いてくれた相手へ誠意を見せるために、どうにか短くまとめようとするのだが、口になると、どうもうそっぽくなってしまふのだ。

大学生のころ、最も多く使っていた理由は次のようなものだった。

「雪が見たかったからです」

「ふうん」

相手の、ふうん、という声や、あまり納得のいっていないらしい表情を見るのがほとんどだった。「本当にそうなんです。香川では降らないから」「ああ」その相槌にもまだ、納

得しきれないものがあるのを感じる。本心を隠していると思われたかもしれないなかった。

「三年間、関東で仕事をしていましたが、島根の人と結婚しようと思い、戻ってきました」
今はこう言うようにしていて、これなら、なるほど、とたいていの人は納得するが、肝心の島根にきた理由はわざと棚上げしている。それでもつつこんで聞かれるなら、また「雪が見たかったから」とか、「香川県の外に出てみたかったから」とか言うしかない。結婚しようと思い、という理由についても確かにそうだし、決して本心を隠しているわけではないのだけれど、どうもうそをついているような後ろめたさが残ってしまうのだ。

思いがあっても言葉がぶれる。どんな言葉も思いに足りない。

他人にうまく思いを伝えられる人になりたかった。人生のどの場面をふりかえっても、ただそこに突っ立っていて何かがひらけるわけではなかった。それでも中学校までは近所に住んでいる、同じテレビゲームで遊んでいる、同じ塾、同じ教室にいる、ということ、輪の中の、はしっこぎりぎりに行きあたってきた。これは幸福なことだと思っただけけれど、ときどき輪から外れても大人が気づいてくれたり、子ども同士でなんとかなったりした。本当の難しさを実感したのは高校生のときで、だれとしゃべってもうわべ、だった。友だちだと思っている子も何人かいたけれど、ひとたび学校から離れてしまえば、連絡を取り合うこともなかった。

何人かのグループといっしょに帰ろうとして、自転車を出そうとしたときである。自転

車に引っかけていた傘が消えている。盗まれたらしい。みんなでラーメンを食べに行こうかと相談していたのだけれど、土砂降りの雨の中、傘なしでは困る。そこで傘を差し、今まさに自転車を走らせていこうとするグループの子らに、事実を告げた。

「傘、盗まれたみたいなんだけど」

「ふうん」

しばらく沈黙があった。ひとりがこう言った。

「じゃあ、また明日ね」

「うん」とうなずいて、「じゃあ、また」と答えることしかできなかった。

グループは行ってしまった。その背中を、あれ、ずいぶんあっさり置いて行くんだな、と思いながら見ていた。友だちという言葉が、そのときにふれた気がした。しばらく軒下にいたけれど雨はやまず、家に向けて、自転車を全速力で走らせた。全速力で走れば、背負った鞆の中身は濡れないということが分かった日だった。

後になってもこの駐輪場でのやりとりをずいぶん考えたけれど、今でもあのときのかれらに対して、被害者意識を尖らせているのを発見する。

かれらの対応は冷たいんだろうか。いっしょに傘を探してくれるなり、自転車を降りて傘に入れてくれるなり、どうとでも手があったはずだ、冷たいやつらめ、と心の中で罵った、あのときの感情が今も消えずに残っていて、正当性を主張している。いや、どうにか

してくれ、いっしょにラーメンを食べに行きたいんだ、と伝えればよかったところをすべ
て呑みこんで、「なんだけど」で止めてしまったこちらが、いけなかったのかもしれない。
あるとき、どんな顔でかれらに「なんだけど」と声をかけたんだったか。かれらに頼むよ
うな顔ではなく、むしろ、かれらを見送る顔をしていたんじゃないか。

輪の中に夕日でいられると思うのは樂觀にすぎるのは分かっている、思いを察してもら
おうとするには関係が足りていなかった。分かっているながらも、冷たいやつらだ、どうし
てあるとき置いていったんだ、と尖った言葉が、ふるえながら頭の奥を飛んでいる。精神
に時効はなく、自己弁護ばかりは優秀で、勝手に犯人を作り上げて呪いつづけることを許
可する、手前味噌の司法機関をもっている。人とうまく関係が作れる人間ならよかった、
そういう人間に生まれてきたかったと、まるでその能力がだれかから当たり前に与えられ
るもののような顔をして、雨の軒下に立っている。

島根県が香川県の真北にあつて、冬には雪を降らせるらしかった。中学生のころに家族
で出かけた松江城や武家屋敷前はでこぼこの雪道だった。小泉八雲がこの冬に耐えきれ
ずに一年足らずでいなくなってしまうという逸話の残る土地だった。高校三年生の冬、
ひとりで電車を乗り継いで大学受験に来た島根県は、雪は降っていないなかったけれど、あつ
い雲が立ちこめていて、香川県のさわやかに晴れた冬空とは対象的だった。

大学の前でバスを降りるとき、バスの料金を間違えて、両替専用の投入口につっこんで

しまった。気がついた運転手が腕を伸ばして、下から出てきた細かい金を次々に料金入れに投げていく。その挙動を見て、どうやら間違いを犯したことに気がついたけれど、きちんと判断する頭が働かず、無言のまま、両替口に小銭を入れる手を動かさしつづけた。うしろに立っている受験生がみな、こちらを見ている気がした。運転手は何も言わず、すばやい手さばきで、料金入れに十円玉を入れていった。押し出されるようにバスを出て、大学の門をくぐり、しばらくしてから、ああ、しまった、と思った。申し訳なかった、せめて一言、謝ればよかった、と。ふりかえるとバスはもう次の停留所へ向かっており、後ろにいた受験生の集団がきびしい顔をして近づいてくるのだった。

新しい土地にいれば自分にもまともな友だちのひとりやふたりくらい、簡単に作れるような気がしていた。高校ですっかり懲りたはずなのに、まただれかが寄ってきて、思いに沿うようなやさしい言葉をかけてくれるのだと考えていた。大学入学の直前から始めたひとり暮らしの数日間は、だれとの会話もないままに過ぎ、いくつかの手続きや荷ほどき、生活の準備で埋まってしまった。入学式の日、すでに周囲はグループを作っていた。

いったいどこにグループを作る時間があったんだろうと思う。説明会のときも、そのあとの簡単な自己紹介でも、教育学部の同級生たちは、自分はひとりではない、というオーラを出しているように見えた。だれかが立ち上がるのを見つけると、あ、あの人はまだひとりかもしれない、と思う。その人の挙動を目で追っていると、すぐにどこかのグループ

に合流し、話しかけているところを発見するのだった。しかもその人は、もう、それが一度目の接触ではないことが明白な、打ち解けたような笑い方をするのだった。

「これからメシ行く人ー」

「あ、行くー」

「どうする？」

どうする？ 今名乗り出れば、きっといつしよに話すことができるだろう。けれども男女入り混じった十数人のグループの会話が、どうしようもなく遠く聞こえていた。講堂の、長机二つ分の距離を詰めることができず、悩んだあげくに、ひっそりと、出ていく。

ひとりさがしをつづける日々だった。教室の後ろの方に座って、同じ講義に集まった人たちの中に、ひとりで行動する人を見つげようとした。学生食堂やメインストリートでも、この人はひとり、この人はひとりじゃない、という分類作業を頭の中で行っていた。少しずつ、ひとりは見つかっていった。次は行動だ。でもなんて声をかければいいだろう？

新入生の一斉健康診断は、うってつけの機会に思われた。何しろ人間が密着している。まだどこにも属することできないひとりを見つけるのは簡単なことのように思われたし、行動もしやすく感じられていた。「まだ寒いね」「背え高いね」「くらいなら言える気がして、口の中で何度も唱えていた。靴や貴重品を外すように言われ、身長、体重をはかられ、渡された尿検査用のコップにトイレで尿を流しこみ、尿を渡し、たっぷり二本分の血

を採られ、血圧計にぎゅうぎゅうしめつけられ、まばたきをし、上下左右を答え、ボタンを押し、シャツ一枚でレントゲンを撮られる。まさかその間、だれとも話すことができずにただ流されて、「はい、これで終わりですよ」というあつさりした声を聞くとは思っていなかった。うそはよくない。本当は、きっとそうなるだろうと思いつづけていた。

二

妻は同じ大学の出身で、今はその大学の事務職員をしている。お互いに仕事を終えて帰宅し、夕飯を食べるときになつて、大学生のことを話す。妻はよく大学生のことを、若い、と言う。

「卒業した次の年くらいは、サークルの勧誘で、新入生ですか？　つて声をかけてもらえることがあつて、そのたびに、ええつ、ちがいます。つて喜んでただけど、もう最近は、絶対ないよね。大学生が、自分と違う生き物みたいに見える」

「若いっていうなら、おれらも十分若いと思うけど」

「そんなことはないよ、もう、わたしおばさんだよ」

ガソリンスタンドでオイル交換をしているとき、待つ部屋で、妻が雑誌を取ってくる。めくりながら、ふうん、へえ、という顔をして笑っているの、のぞきこむと、「この雑誌に出てくるモデルの年齢、ほとんどわたしたちより年下になつたね」と言うのだ。二十

二歳、二十五歳、二十歳、と指差していきながら、大学生のころに読んでいた雑誌が、遠い世界のもののように見える、とつぶける。オイル交換を終えてスーパーマーケットへと自動車を走らせる途中で、「あの雑誌読んでから主婦雑誌読んだけど、ああもう、わたしこっただって、すぐ思った」とつぶやいていた。

確かにそういう年齢になってきたのかもしれない。妻の言うことはよく分かるような気がする。このごろは十代、二十代くらいの人を見つけると、すぐに年齢を確かめたくなるようなところがあつて、テレビで活躍するサッカー選手や野球選手、フィギュアスケートやバレーの選手たちが、自分たちの年齢を追い越していないかと、ひやひやしながら見ているのだ。そして同年齢以上の人が第一線で活躍していると、あつ、まだ大丈夫だ、と感じるのである。いったい何が大丈夫なんだろうか。

大学で学費徴収を仕事にしている妻は、最近の学生はちよつと変だ、と言う。

「まあうちの窓口に来るような学生は、親が学費払えなかつたり、うまく手続きできなかつたりして、すでにだいたい問題抱えてるように思うんだけど」

「そういうこと言つていいの」

「でも変なんよね。なんか、年々変になっていく気がする」

学生が親の収入証明を学費の窓口に取りに来た話や、片言で話すのでほとんど聞きとることができない学生の話をする。

「うまく日本語を話せない留学生はいっぱいて、そういう人はうちの窓口にもよく来るから、留学生だと思わね。だけどたまに、あんまり片言だから、うわー、これは留学生だな、と思って、学生証を見せてもらったら、すっかり日本人だったりするんよね。両親ともよくある日本人名で、外国要素が入ってるとはとも思えない」

「それ、よくうちの大学入れたね」

「でもその子は別に日本語を知らないわけでも、頭が悪いわけでもないんだと思う」

「なるほど」

よくうちの大学入れたね、と返した時点で、妻が何を問題にしようとしているのか、なかば分かっていた。

妻がこんな話をしたことがあった。休学して二カ月の大学院生がおり、半期八万数千円の学費の振込がまだだったので、妻は書面で催促をした。するとある日、その学生から指定口座に入金があつて、確認をすると九万円の振込があつた。正確に説明していたはずなのだけども、指定よりも多い金額が入金されていたのである。そこで学生に電話をかけ、一度事務所に来てもらうことになった。

窓口やってきた学生は、フード付きの白いトレーナーを着て、下はジーンズ、無精ひげを生やしていて、妻の言葉では「地味なタイプ」だった。

「電話でも確認させてもらいましたが、九万円入れていただいているということで間違い

ありませんね」

「はい」妻に返事をするというよりも、つぶやくような声だった。

「実際よりも多めにいただいているので、お返ししないといけないんです」

「はい」

「ですので、こちらの書面に、必要事項を記入していただきたいんですが、今日、この間お願いしました、印鑑はお持ちですか」

「ああ」少し遅れた反応で、学生は肩にかけた鞆を探り出したが、時間がかかると思ったのか、途中で動きを止めて、「はい」と言い、うつむいた。

学生は必要事項を書き、窓口に戻ってきて書類を出した。何も言わずに窓口立っているのも、パソコンに向かっていた妻はしばらく気がつかなかった。

「では二週間ほどで差額が戻りますので、ご確認くださいね」

「はい」

学生は帰っていった。そのときはまだそれほどの印象をもたなかったらしいが、しばらくして妻が学生の情報を確認していたときに、異変に気がついたのだという。

学生が手書きした書類には、「吉永昂大」という名前が記されている。ところが学生証のコピーや、パソコンに入力されている学籍を確かめると、「吉永晃大」となっているのである。「コウ」の字が登録と違うのだ。これは問題だと思つて学部生時代のデータを調

べたところ、学部生時代には、確かに本人の書いたとおり、「吉永昂大」で登録されている。つまり学籍管理の人間が、大学院への入学手続きの際に漢字を間違えて登録してしまったようなのだ。これはもちろん謝って訂正しなければならないことなのだけれど、院生になってからすでに一年近く経つ今の状況で、本人が一度も、「自分の名前が違います」と言い来なかつたことに、妻はおどろいたと言う。学生証は学生食堂や図書館に入るのに必要なものでもあるので、一度も見ることがないというのは考えづらかった。自宅に届けられる書類もすべて別の名前で送られてきているはずである。

学部生の「吉永昂大」は消えて、院生の「吉永晃大」が新たにあらわれた。ふたりの人間が大学の管理システムをすれ違った。正しい人間は物理的に存在しているのに、間違つた人間の存在が許されている。

妻の話を聞きながら、なるほど、おもしろいな、と思った。

「めんどろだったんかね」

「分かるけど、学生証は身分証でもあるんだよ。本人の信頼も、大学の信頼もゆらぐでしょ。それに、別の名前がひとり歩きしていくのが、気持ち悪くなつたのかな」

情報の限定された状況で、理由をとやかく推測し、ここに記すようなことはしたくないけれど、大学事務員の立場を有し、大学生から離れた自分をつよく感じているらしい妻にとってみれば、この状況を異常なことだととらえるのは、妥当なように思われた。

なぜ「吉永昂大」は一年間も名前の間違いを指摘しなかったのか。これだって本当に確實だとは言えないが、ひとつだけどうも確からしいと言えるのは、「吉永昂大」が「吉永晃大」であることを自分から選びつづけているのではないことだ。かれは署名を求められれば、正しい名前を書くのである。

「社会では、そういうの、やっていけないでしょ」

妻の口調には、大学生を、最近の若者、と断じて叱咤するようなひびきはなかった。寄り添いすぎず、突き放しすぎず、自分のこととしてではないけれど、自分の内側を見て話しているようなところがあった。大学事務としての五年間の経験をふりかえっただけでも言えない、言わない大学生が、増えているように感じるのだと言う。増えている、というのは統計を取ったわけじゃなく、妻が自分のことを「おばさん」と言うように、少しずつ大学生を自分から遠ざけて見ている証拠なのかもしれないけれど、まだ妻が上からものを言っているように思えない。やっていけないでしょ、の奥に、妻の五年間の苦労がひびいている。

社会という言葉はずいぶんあやしい。目の前に立ちほだかっているくせに、つかまえようとすると、すりと逃げる。働きはじめるまではずっとぼんやりした言葉だった。働きはじめるとだんだんピン트가合って、輪郭だけはくっきりしてきたのに、中身にはいくらか手を伸ばしてもきちんと触れなかった。社会という言葉を追いかけて、とらわれて、こう

いうものだと納得しつつ、新たな疑いをいだいて、いまだにうまく距離をとれずにいるのだけれど、「そういうの、やっていけない」というのは分かる気がする。確かに自分から何かを選ぼうとしなければ、やっていくことは難しいだろう。そういう事実を何度も見せられてきたように思う。

その大学院生とは、年齢にすれば三年や四年の差がある。けれどもかれの周囲との関係のもち方は、自分たちとは違う種類のものなんだろうか。これは一過性の若さだろうか？

三

ずいぶん田舎だと聞いていたから、島根県に來れば星空が見えると思っていたけれど、松江市は明るかった。香川県高松市にある実家の方がかえってよく星が見えたくらいだ。アパートのベランダで缶ビールを飲みつつ、満天の星を眺めながらだれかとしずかに話をしたいという願いは、大学に在籍していた四年間で一度もかなえられないことはなかった。もともとアパートのベランダでなければ、一度だけある。

今は合併されてしまったけれど、大学に通っていたころ、東出雲町はまだ松江市ではなく、建物の多い市内中心部とは違う雰囲気があった。所属していたサークルが中山間地域に住む高齢者のための介護予防拠点施設とつながりをもっていて、大学の休みに出かけていって、竹トンボや竹馬といったおもちゃの作り方を習ったり、地域の行事に参加させ

てもらったりしていた。施設の主催するホタル祭りというイベントにボランティアとしてまじらせてもらい、そばやうどんを運んだり、屋台の売り子をしたりした。サークルの間といっしょに会場となった三十メートル四方の広場を行ったり来たりして、忙しく働いた。汗のふきでるような昼の暑さがすぎると、冷たい風が空気にまじった。山陰に日がしずみ、あちこちの提灯に火がともされはじめる。初夏の時間の流れが肌にしみた。

「ここはいいけん、ホタル見に行ってきたよ。あんたら、あんなにたくさんホタル見たことないだろ」

ビールで顔を真っ赤にしたおばさんに言われて、近くにいた数名の同級生と合流した。まだ働いている部員もいるはずだったけれど、建物の外にある光源はテーブルに置かれた提灯だけで、広場に立っていると足元すらよく見えない。

「全員抜けるわけにはいかんからね、行こうか」同級生と何度も、本当に全員に声をかけずに行っていくんだろかと迷って、近くをうろついているうちに、数名いたはずの人がひとり消え、ふたり消え、背の高い河野君とふたりで残されていた。

ホタルの群生が見られる川辺は広場を抜け、あぜ道を歩いて三分のところにある。昼間に通ってきたから場所は分かるけれど、ひとりでは行きづらい。

「暗いけん、おれ河野君のあと、ついてくわ」

「部長さんとか、呼ばんでいいんかね。おれらがホタル見てる間も働いておられるんでし

よ」「そうやねえ、まあ、いいんじゃないかな」「いいんかな」河野君は歩きながらも、ずっと他の部員のことを気にしていた。気にはしてもふたりとも声をかけられないのだ。部長はよく働く人だったから、きっと闇の中で働いているだろうと思った。地域の高齢者の輪の中にもぼつと入って、白い歯を見せて笑う女性だった。たった一歳年上だったが、十年分くらいの開きがあるように思われた。提灯のおだやかな火のゆれるテーブルのそばで、相手に向かって次々明るくひらかれる笑顔の裏に、どんな表情が隠れているのかは分からないけれど、部長のような人になりたいと思う気持ちは強かった。

ゲンジボタルの群れが、地面から湧き上がってくるように飛んでいた。光が草場や川の水をかがやかせていた。飛んでいるのはじゃれ合って、輪を作ったりした。光跡は数字やアルファベットに見えた。だれかのための暗号のようだった。あたりに集まる人はみな声をひそめ、光の道筋を追いながら、熱心に何かを読み解こうとしているように思われた。河野君は先に部長が来ているのを見つけた。部長は他の部員と笑いながら近づいてきた。

「河野君たちも来てたの」

「はい」

「感動するよねー」

感動？ その言葉に思考が止まってしまい、うなずき返せなかった。

「はい」

河野君はすぐに明るい声で返事をした。ホタルなどたいして見もせず、他の部員を見つげようと目をこらしてばかりいたのに、そういうことを言うのだ。

「まだそんなに見てないだろうから、うちら先に戻って仕事してるし、ゆっくり戻ってきていいよ」

「ありがとうございます。でも」

「いいよ、いいよ！」

河野君は「でも」の後に、何を言おうとしていたんだろう。ひとこともしゃべらずに、後ろでただうなずきながら、感動の意味とか、でも、のつづきを考えていた。

部長は部員を引き連れて戻っていき、すぐあぜ道の暗闇の奥に見えなくなつた。会場の提灯の火が、ひとかたまりのホタルのようだった。人の声が遠かった。

河野君は何もしゃべらずに立っていた。さっきの河野君の明るい声がまだ耳の奥に残っていて、しゃべらないすがたが、余計に何かを語ろうとしているように見えた。河野君は目を細め、ポケットに手を入れて、急にホタルを見はじめたかと思うと、水辺に降りてホタルを一匹つかまえた。河野君の開いた手の中に虫がいて、触角をたえず動かしていた。河野君の指のすきまから光がこぼれている。その光に、「おおっ」と言った。「おおっ」は精一杯だけれど、まだうそっぽかった。でも河野君はうなずいて笑った。

ホタルがぼつと飛び上がり、どこかの草に着地して、たくさんの光のひとつになつてし

まうと、ホタルといっしょに何かを取り逃してしまったような気がして、しゃべらない河野君のあとを、しゃべらずにくつついて戻った。

河野君は感動していたんだろうか、と考えていた。けれど「感動した？」と声に出して聞いてしまうことで、この往復がふたりにとって意味のないものになりかねなかった。自分だけならともかく河野君にとっても意味のないものになってしまうのは乱暴な行為だった。それなら部長のように、「感動したねー」と笑って言えはいいのかもしれない。

高校の同級生まではいなかったけれど、大学の同級生になると急に一年や二年の歳の差が発生する。その差が河野君ともあつて、河野君はストレートで来ていれば一年先輩である。同級生には「君」をつけて呼ぶ、上の人には「さん」か「先輩」をつけて敬語で話す、というのが当然のルールだと思っていた身には、河野君との接し方を見つけるのが難しかった。結局同級生ルールを適用し、「君」をつけて呼ぶことにしたのだけれど、いつも喉の奥に違和感があった。堪えきれずに、ついこういうことを言ったことがある。

「ごめんね、本当は河野君、一年先輩やから、敬語でしゃべらんといかんのやけど」

「別にいかんことはないで」河野君は笑った。人の笑いというものは、本当にはかりづらなものだった。「おれも、変に意識されるより、『君』って言われた方が、落ち着くかな。でもときどき思い出して、『さん』つけてしゃべってくれたらいいよ」

河野君も自分が年上であることを気にしているのは分かった。

ときどき「河野さん」と呼ぶのはたいへんに難しいことで、実はしょっちゅう思い出して意識していた。「さん」とは一度も呼べなかった。それなのに一度決めた「河野君」が自分の口から出されるたびに、河野君との仲が、ズレていく気がした。

ホタル祭りは拍手で終わった。会場の片付けは翌日に回された。暗いから、というより、主催者のお年寄りが、すでにろれつも回らない酔っぱらいだからだ。施設の建物に入って、またみんな飲み直す。成人している河野君はたくさん酒を注がれていた。

夜遅いけれど、タクシーで駅まで着ければ帰れなくはなかった。女性部員は帰ったけれど、部長は残って、酒を注いで回っていた。残った男らは日付が変わるまで会に参加し、そのあと毛布を借りて、きたない宴席のテーブルの下にもぐりこんで寝た。

どこかのおばさんの出した自動車が部長をあたたかい寝床まで運んでいった。お年寄りも、おばさんたちがみんな拾い集めてしまった。エンジン音がいくつもずれて広場にひびき、遠くなっていくテールランプが窓から見えた。疲れきった部員たちは蝸牛のように丸くなり、しずかだった。

部員たちはすぐに眠ったらしい。眠気がすぐにやってこず、毛布の上から何枚も座布団をかぶり、膝の間に手をはさんで寒さにたえていると、背中を叩かれた。

「飯田君、ちよっと、外に出ん？」

河野君の顔が近くにあった。

「おれ眠れんけん、ちよつと付き合つて」

だれも起こさないように、十分に気をつけたしゃべり方だった。毛布から這い出した。ふたりに足音を殺し、それでもきしむ畳の音に笑いながら、広場に出た。

提灯の火はすべて落とされていたというのに、だれもない広場は、祭りのときよりも明るく感じられた。周りに灯火がなければ暗闇に目が慣れるのだ。もう夏が来ているとはいえ、真夜中の風は冷たく、テーブルにさわると手のひらに露がくつついた。

「飯田君、やばい。ちよい、見て」

河野君が言った。河野君は空を見上げていた。

「えっ」

顔を上げるとそこには星空があった。空のすみずみまで星が満ちていた。明るいものも暗いものも、遠いものも近いものも、みなひとつの空の中にあつて、その天を貫くように、青白い光の集まりが川のように流れているのだ。

「あれ天の川じゃね？」と言つと、

「そうだ、うおお」と河野君がうなつた。

「星すげえ」と言つと、

「すげえ！ すげえっ！」と河野君がさげんだ。

さそり座のアンタレスを見つけ、北斗七星を見つけ、はくちよう座を見つけていく。ふ

たりとも小さな声だったのだけれど、広場に反響して、ずいぶん大きく聞こえた。声は今まさに同じ空を共有している、ふたりだけのもので、中に眠っている他の部員たちには聞かれていないことになっていて。視界にうつらない者には、聞こえていないことになっているのだ。記憶の美化作用をまぬがれないのは承知の上だけれど、あの瞬間、これを感じると言ってもいいかも、と考えたのは確かだった。でもどちらの口からも、感動という言葉は出なかった。「すげえ」とか「やべえ」とか、たいしたことのないつぶやきみたいなものばかり、ふたりして空に放っていた。ただ、ホタルを見たときに感じられたようなく、つぼさは、どこにもなかった。そのつまらない言葉たちが、とくべつな空気を生み出していく気がした。河野君と初夏のしずけさの中を歩きはじめた。

「飯田君はどうするの。いい人いないの」
「ああ」この場では何でも言えるように思われた。「いるよ。おれ、七月になったら、告白しようと思っとる」

「今までもろくにそのことを考えてもいなかったのに、言葉に出してみると一気に重みがついて、ずいぶん前から真剣に考えていたことのようになるのだ。」

「えっ、やっぱりKさん？」

だれに好意をいだいているのか、部員にはだいたいばれていた。Kさんはホタル祭りに来なかったので、昼の駅で男たちはみな「残念だね」という顔をして、それから笑った。

「ああ、うん、そう」

星を見つつ、広場を何周も行ったり来たりしながら話した。

「飯田君がやるなら、おれもやりますよ。やってやりますよ」

「Y部長でしょ」KとかYとか、だれに知られるものでもないのに、ぼかして話す。

「え、ええ？ おれ言ったっけ」

「見てりやわかるよ。まあ部長いい人だし、美人だし、いいんじゃないかな」

「そこなんですよ、部長さんはいいい人で、美人さんでしょ。おれ、ほんとは部長さんと、同じ年やろ。それで、話とかしてても、けっこう音楽とか、ヒップホップ好きやって言うし、話が合うんよね。こっちがね、話振ると、楽しそうに話してくださいるんですよ。それでね、いいなあと思うんやけど、いい人で、美人だとね、ほら、彼氏さんとかね」

「いるのか聞いてみたら？」

「うん。そうなんやけどね」

「まあ聞けんよね。おれも聞けん」

「ふつうに話すのはできるんやけど、そういう話にね、踏みこんでくのは、ほら。おれ、緊張すると、どもる癖があつて。意識するとだめなんよね。今日も、何度も部長さんとお話そうと思つてたのに、いざつてなると、ちゃんとしゃべれなくなつて」

「ああ、そっか」川辺での部長と河野君を思い出しながら聞いていた。

「飯田君はKさんと、もう、そういう雰囲気になれそうなんやる？」

「や、Kさんが彼氏おるか、おれも知らんし。でもなんか、ちよつとやる気出た」

「うん、まあちよつとやる気出てるよ。うん、出てますよ、おれも」

こんな話をしながらふたりで一時間以上も歩いていた。

ホタルのいる川辺にも行つたが、早い時間に見たときの湧き上がるようないきおいはなく、草は眠るようにゆれていた。あぜ道の奥に見えた広場の灯りもなく、人の声もなく、ただしずかに何匹かのホタルが、今にも消えそうに飛んでいるのが見えるのだ。

川辺ではふたりとも小声になった。

「ホタルの鳴き声って聞いたことないな」

「虫のコミュニケーション能力って、だいたいひとつで限界らしいね」

「限界？」

「うちの教授が言つてた、ひとつの説やけどね。コオロギは音、ホタルは光」

「なるほど。……そろそろホタルも消灯時間かね」

「まあ、虫も寝るけんね」

どちらがもどろうと言ひ出したのか、施設にもどつて眠りについたので確かだけれど、朝になつてもまだ夜の延長で、天の川が意識にとけきらず、からだはふらついていた。

朝の片付けはほとんど役に立たなかつた。お年寄りはずつかり酔いからさめて、機敏に

動いていた。

軽トラックの荷台に乗せられ、駅まで運んでもらった。後で部長本人から聞いた話だけれど、部長は片付けの最中、なかば本気の目をした老人に、あんたうちの嫁に来ないかと誘われていたらしく、「夜、お酒が入つてるときは笑つて聞き流せたけど、朝になって真顔で言われるとさすがにこわいよね」と笑っていた。河野君は、「それはこわいですね。でも先輩はほんと、すてきですから」と精一杯の顔で笑った。

その後、Kさんに公園で告白をした。人生で最初の告白で、何をどう伝えたのかもよくおぼえていない。河野君が部長に告白することはついになく、なくなったように見えた河野君とのズレは、時間が経つごとに深まってしまった。

まあ、飯田君はね、告白できる人やから。おれはできん人やから。顔を合わせるたびにそう言われているような気がして、河野君と話すことができなくなった。

Kさんに告白できたのは河野君のおかげだったと、一言でも言えればよかった。

四

何名かの同僚といっしょに、職場の飲み会の幹事を任せられるとする。だれかが役割分担を行う。会の場所や時間を決める人、みんなに都合を聞いて回る人、余興を考える人。

「飯田さん、幹事長ね」

と言われて「はい」と受ける。何でも「はい」と言ってしまうのだ。その仕事がどれほどの大変さで、どれほどの重みをもつていて、先にどんなものが待ち受けているのかをろくに想像することもなく、「はい」と答える。さて幹事は動き回り、場所や時間が設定され、出欠席が確認され、余興はすっかり考えられてしまった。飲み会の日がもう明日に迫る、という段になって、まだ何も幹事としての責務を果たしていないことに気がつく。幹事長とはいったいどういう人なのか、何をしなければならぬのか、ちよつと考えて、考えるのをやめて、日々の仕事で上から蓋をしまつていた。

「すいません、なんか、みんなやつてもらつて」

「いいんですよ」

年配の同僚たちが給湯室で、飲み会のためにみんなを笑わせる必殺のジョークを考えているとき、その場において、ろくにネタを提供することもできず謝っているすがたを情けなく思う。

「当日くらいはきちんと仕事したいんですけど、幹事長つて、何すればいいですかね」

「最初の挨拶かな。あとはどっしりかまえてくれてたらいいよ」

「いやいや、それじゃ申し訳ないので、お酒注いだり、注文したりしますね」

「うん、じゃあ、そうしてくださいね。まあわたしたちもやりますけん」

当日の挨拶は紙に書いてきた。立ち上がると、座がしずまりかえつた。同僚十五人がこ

ちらを見上げているのが分かった。となりに座っている同僚が、テーブルの下に隠した紙をのぞきこんで、ふっと笑った。

「本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。(一礼)今年度も始まって三カ月経ちました。さて、今日ここにいらっしやるみなさんの、明るい表情を見ていますと(場をのぞきこむ)……つてあれっ、暗い顔の方もおられますか？ ああ、照明の具合でした、失礼しました。(笑い) みなさん今年度も、順調なスタートを切ることでできたのではないかと勝手に思っています。さてさて、暑い日が続きます。今日は暑気払いとして、このような会を計画させていただきました。途中には楽しいゲームもありますので、どうぞ最後までお付き合ってください。では乾杯のご発声を、山下部長に……」

何もしていない人間が、計画させていただきましたと、自分の手柄のようにしゃべったことを後ろめたく思いながら過ごす飲み会だった。幹事役をとめた同僚はみんな、だれかの酒がなくなるのを察してすぐに動いた。料理を注文したり、ひとりでいる人を見つけて声をかけたりしている同僚を見ているばかりで、なかなか腰を浮かせず、かたまっている。この仕事に就いてもう六年目だというのに一年目から変わらない。

社会人の飲み会を窮屈だと、遠くにいる友人に訴えたこともあった。「なんであんなに酒注いだり、あいさつして回ったりせにゃいかんのだろうね。もっと気楽にできりゃいいのに。おれだったらその方が楽しいけどね」

友人はうなずいてくれたけれど、酒を注いだり、あいさつをしたりすることが大事なのではなく、だれかのことを考えること、気を遣うということが大事なかもしれないと思うこともある。みんながなるべく気持ちよく終われるように気を遣う役目としての幹事が必要なのだと。そういう幹事ができるような人間になるだろうか？今は気を遣われてばかりだ。一方で、役目って体のいい言葉だな、ただの人身御供だろう、幹事は気を遣われなくてもいいのか？とも思っている。

「政樹君は誠実な人やね」

妻の実家ではそう評されているらしい。誠実な人ってどんな人だろう。誠実の項を辞書で見ると、「私利私欲をまじえず、真心をもって物事に当たる心」というような表記。真心とはなんだ。「偽りや飾りのない心」そんな高尚な心もちあわせているだろうか。大でひとりさがしをしていたころから十年経ってもなお、見せようとする自分と、見せられる自分の間に距離がある。どこまでいけばびったりくるんだらうと考えている。こんなことを考えている人間が一方では毎朝、仕事に行きたくなくて、布団にもぐりこんで愚図っている。仕事につながるから読んだ方がいいと上司から薦められた本など、その場では「読んでみます」と言っておきながら、読んだことはない。誠意を見せようという思いに行動が追いつかずにいるうち、誠意の意味すらはかりかねている。

「でもわたしも、誠実な人だと思うよ」

妻に言われて、そうか、と思う。「それって、どういう人？」

「うーん、言葉では、うまく言えないけど、そう思う」

「説得力ないな」

「でもそう思う人が多いんだから、ほんとにそうなんじゃない」

「そうかねえ」

目の前に妻がいるというのはふしぎなことだった。大学に入學する前、バスの運賃もまともに払えず、並木道をひとり歩いてきた人間が、十年後に妻と同じ部屋で暮らしている。この生活が明日も明後日もつづくだろうという確信をもっている。

目の前から消えてしまった人間ならずいぶんいる。携帯電話の電話帳に記されたアドレスや電話番号は今、連絡を取り合うこともできず、つながったとして、どんな顔をして話せばいいのかわからない、曖昧な人間たちを示す記号ばかりだ。どこかの空で星がひとつずつ人間に知られず死んでいくように、この人たちが死んでも気がつかないんだろうと思う。消灯された記号の列の中にまだ灯っている記号はほんの数えるばかりで、濃くかわりのあった人ならまだ記憶の中で動かすこともできるけれど、かれらも更新されることはなく、そのうち脆弱ですぐに消えるデータそのものになるんだろう。

大学一年生のころ、熊田君という人が近くにいた。

教育学部生の男たちがかたまつて、缶コーヒーを飲んだり、煙草を吸ったりしている。

その横をすり抜けて教室に入ると、ひとり、前列窓際の席で本を読んでいる人がいた。前からこの人はひとりだと感じていて、何度も声をかけようとし、かけられずにいた。その人が熊田君という名前で、同級生なのは分かっていた。まだ教室にはだれもいなかった。今だと思った。急ぎ足の靴音が、やけにひびいた。熊田君のうしろの席にかけた。

肩を叩く力が弱くなつて、叩く、というよりも、つつく、になった。

「はい？」

この人はこんな声をしているのか、と思った。想像よりも低い声だった。ずっと腹のうちであたためていた言葉を、大学に入つてはじめてぶつけることができた。

「よかったら、友だちになりませんか」

「はっ？」

「いや、おれ、大学入つてから、まだ友だちいなくて」

「おいおい、『友だちになりませんか』って聞かれたのは初めてだなあ。友だちって、そういうの言わずに、なるもんなんじゃないの」

熊田君の言葉をだまつて聞いていた。窓からの光が机にはねかえり、まぶしかった。「おれ、そういうの言われたことないから、なんて返せばいいのか分かんないね」

「メアドの交換とか、どう？」

「まあいいけど……」

教育学部の同級生の多くは小さな手さげ鞆に、最低限のものしか入れなかったけれど、熊田君はいつも大きな黒い鞆を斜めにかけて、重量感たっぷりにゆらしつつ、並木道を早足で歩いていった。だれよりも早く教室に来て本を読んでいた。

熊田君はだれかと話す様子もなく、こちらから話しかけようと思ったときにはいなくなっていたけれど、あとで、「メシを食おう」と短いメールが来ることがあった。

熊田君の話には「新潟のやつら」がよく出た。新潟のやつらは熊田君といっしょにロードバイクで山々を走り、夜にはテントを張って、すばらしい星空を見たんだそうだ。家には大好きな漫画や小説がたくさんあるので、熊田君の家には、本を読みに来る人が絶えなかったとか。新潟のやつらと夜に話すんだと言う。

「山根ってやつがいて、こいつがすげえ変なやつなんだ。電話越しでも十秒に一回は笑わされるんだよな」

「へえ」

新潟の話をどれだけされてもよく分からなかった。熊田君は島根にいても、島根にいないように見えた。新潟の話以外を聞きたかったけれど、「他の話は？」という類の言葉が、どう考えても棘を含んでしまうような気がして、何も言えず、ただ相槌を打っているしかできなかった。熊田君は食べ終わるとすぐに、「先に出てるわ」と言い、重たそうな鞆を持ち上げて、次の教室に行ってしまった。

河野君やKさんのいるサークルに入ったのは、熊田君と話すようになって二週間くらい
のところである。五月になりかけていた。決心をつけてくれたのは熊田君で、かれは二週間
経っても、いっこうに新潟のやつらの話をやめなかった。それでも少しずつ人に話せるよ
うなストックは減ってきたみたいで、ふたりで飯を食うときは沈黙の時間がずいぶん増え
た。箸やスプーンの食器に当たる音や、熊田君の食べるカツが歯にちぎられる音などを聞
きながら、どうしてこんなつまらない音を聞いているんだろうと思っていた。こんな状態
では、自分はどう教育学部ではまともによつていけないだろう、と思いながら食べていた。

熊田君はいつも先に食べ終わった。

「おれ、先に出てるわ」

「ああ、うん」
熊田君はろくに息もつかないうちに立ち上がると、鞆を持ち上げて肩にかけた。

「じゃ」

「うん」

熊田君が去った後、かれの座っていた椅子の近くに一冊のノートが落ちていたのが見え
た。拾い上げて表紙を見ると、題名のない無地のノートだった。下に小さく書かれた「S・
K」が、熊田君の本名をあらわすイニシャルだと気づいて、食堂を見回したけれど、かれ
のすがたはもうなかった。後で返そうと思いつながら、ノートを開こうとする手を止められ

なかった。そこにはずいぶんかわいい字で詳細に料理の献立や食べたものの記録が書かれているのだった。毎日の摂取カロリーや、自分の作った料理のレシピなど。いっしょに食べた店のことも書かれていて、細かい絵や色も入っているのは意外だった。なるほど、と思つて熊田君のノートを閉じ、そのまま鞆に入れて帰った。

何度も開いては閉じたサークルの名簿をもう一度開いた。ここなら大丈夫だろう、怖い人がいないだろう、いっしょに楽しく話せるだろう、という雰囲気、紹介の文面からなんとか読みとろうとした。その結果が環境系のボランティアサークルだった。

一時間以上も部室棟の前でうろつき、ようやく入った部室には人がおらず、金魚だけいた。入部希望者はこちらへ、という貼り紙があり、そこに部長の番号があった。

一度気持ちを折られていたので、もう一晩迷つて、迷ったあげくにかけた。電話はすぐにつながった。

「あの、飯田と言いますけど。あの、サークルへの、入部希望で」

「電話してくれてありがとうございます！ わたし二年生の山本って言います！」

その瞬間、世界がぱつと明るくなったような気がした。

「今日は夜に定例会があるから、みんな集まるよ。そのあといっしょにご飯でも、どうですか」

その日のうちにサークルに入ることが決まった。

河野君や他の部員と過ごすようになる、熊田君とは話をしなくなった。相変わらず教育学部内ではひとりで過ごしていたけれど、ひとつ落ち着ける場所ができたことで、ずいぶん気持ちが悪くなった。ノートはずっと鞆に入れて持ち歩いていたけれど、熊田君に渡せなかった。「この前、これ落としたりやろ」と声をかけることができずにいるうち、どんどん日が経った。熊田君を見つけると、気づかれないうちに隠れるようになった。そうすることでわずかな罪が少しずつ大きくなっていく気がしたけれど、サークル活動にのめりこんでいくことで心をだました。熊田君からはまだ「今なにしてるの」とか、「メシどう」とか、ときどき短いメールが来た。ノートについてふれるようなメールは一度もなく、こちらからもしなかった。何度かはメールを返したけれど、そのうち、こちらからのメールも短くなった。

「熊田君、サークル入った？」

「別に。飯田君、メシどう」

「ごめん、今日は無理」

「あ、そう」

前列窓際で本を読んでいた熊田君は、ある日大学からいなくなった。いなくなったことにすらしばらく気がついていなかったし、いなくなったこともすぐに忘れた。「どうして？」とメールを打ったところで相手も困るだろうと思われて、しなかった。熊田君のノートは

大学を卒業して関東に引越すときに久々に見つけた。そのときに捨ててしまった。

熊田君のアドレスが消灯して、もう十年になる。あのころサークルでいっしょだった人たちも、今はほとんど消灯している。河野君や部長と連絡を取り合うこともない。相手にとつても同じだろうと思う。こちらが死んでも気づかれぬままに、ただ記号だけが、相手の電話帳に残っているだろう。それは仕方のないことで、生きていても死んでいても、ことさら多くの人とつながって迷惑をかけなくていいと思っっている。

でも熊田君の大きな鞆の中身について、もう少しきちんと聞けばよかった。